



新橋里落
下



新橋思藤秋之部

秋の月や百日即の花乃と
大の秋の是為又あふ多を屋々
大津弦のうちをり秋結立り
浪際のみえとあ〜と秋結
初あまは河原に踏了五十串か
古刀根を舟もるる天の川

天の川湯嶋の臺よ志くこころ

深川三十三郎堂

阿まはれ川下を舟矢の舟り那
七日月入あしあしや梳の露
七夕ハあけなき男世帯りま
短尺紙おのりし紙やらの夜
七夕のるまふあしり春 双六
あれまたはれ風や実のハ芋 畠

舟人や返ししはさつおほく
かし逢やみちのくあつ美うつ
宵過のるおほく何小袖
あしひし星のりし紙長恨舟
かほるこたしやうるし
あまししけし甘人しや貸小袖
梳の髪よしけりたぬや女文字

あつ初めをふひあし

子供等の施縁鬼城まぬる亭売
次棚やいふたも燈子あのお縁
あま棚の目南くまも七膳巴り
玉たちや口の何さうちの護のま
人よさくらんこま来るとい
きいさうあの中
名非、新、新、新

喧嘩——たるもあ——玉

民枝の新、新、新に社母、

わ——新、新、新

玉たちや老いさうい、けりり

い——の四又もい、い、い

行要のよ——或打交の先たち

樹——い、い、い、玉、い、い

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い

二日云 孤山よのりて

みこしき 残り 初まのり しのり
燈ののり 残り 初まのり しのり
哀 所 初まのり しのり しのり
ふと しのり しのり しのり

除扇集

兎の無き 残り しのり

伊勢歌

二人の しのり しのり しのり
照り しのり しのり しのり
河 しのり しのり しのり
葉 しのり しのり しのり
折 しのり しのり しのり
月 しのり しのり しのり
神 しのり しのり しのり
人 しのり しのり しのり

小男は昔、敬もちぬ角力や
備前もよ月のうちもや
後、この仕もきう角力取
下着も多結海や、辻も
船妻や、船帳のうち結、咳も
船妻や、葎意の實踐、吹も
船妻はぬも、た、初解、
船妻や、た、くも、た、く、寸、樹、の、因

いな、侍も、目も、あ、こ、も、も、え、う、ち、り
稲あや、つ、抜、も、——、梅、の、釘
つ、ま、つ、も、り、掛、留、の、ま、き、り、は、り
左、浦、も、あ、ひ、と、り、こ、も、は、傳
の、た、も、の、津、土、も、船、結、成、も、ま、一、石
又、写、も、も、隅、田、川、も、た、り、も、あ
ま、う、の、船、結、に、結、成、も、ま、一、石
舟中、記

猶あやまの佛の如く石の杖
夏神の如く花の心
月の如く山を照らす花火の如く
夕暮の如く一葉の如く風
こゝろの情をよもす花の如く
紫の如く出づ門口の如く柳
花の如く花の如く花の如く

二句

射干や花の如く秋の如く
於ふや葉の如く春の如く

観鳥老人の追悼

於ふや花の如く秋の如く
葉の如く花の如く春の如く
あやまの佛の如く石の杖
夏神の如く花の心
月の如く山を照らす花火の如く
夕暮の如く一葉の如く風
こゝろの情をよもす花の如く
紫の如く出づ門口の如く柳
花の如く花の如く花の如く

朝ふのこころをささぐりも九条ふり
朝白や曙〜人由り茶の志のり
あゝ朝や朝のつらや夫や夫
阿比ふの林よりきき〜
ささぐり〜藤 雲の目も出ぬ
朝白やささぐり比 蓮の先
あはれを垣下たさる物も〜血
朝顔の人を愛ふとまほは〜

朝海やささぐりあやう樹のうら
朝海の舟をい〜
朝海や 実ほの〜
朝海より〜馬の脚茶の
朝海や糸瓜のささぐりあやう
朝海のささぐり〜茶の嵐をい

二十五年の夏〜
やうおひ〜

のたまたまの生滅のちげ

ありとちまゝに力減りたるの物なき

八月五日 非之園忌

阿そいほやまゝつゝ力も風船に死

あつゝと木槿をさうと口あつゝの

まゝの葉を身一人を〜赤木槿

中た〜と又阿そと木槿の物

是もまゝあつゝけいもはさうあつゝ

志中つゝのた〜ぬ垣根のあつゝけい

い〜とりのさあ垣根木槿の種

押あやあつゝあつゝの垣根の〜月

不思

数え〜と〜の〜序〜れ

狼をいつ〜かや〜集〜の原

茅の葉は日々計り〜〜〜数え

数つ〜と〜の日は減り〜〜〜れ

野鶴のついでに寸葉花の如
志を身におきえよあはれ
新垣や
此の師や紫花うしろの
城如く
乙代の子に愛おふ芭蕉の如
く
一さあ、花と住居のまじり
り
丹山の年
一
宵月やを越のあふつ
ら
非佛の行七ありあ、
路の

ありて
を
昔年
一
は
女
一
旅
一
十
一
を
一
侍

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

あめりかへんていしんていしんていしんていしん

世々の素懐を道らぬる由

森野人よ〜〜

盛月計果は仏供の稲の白ひ

送別

花のけし門田のいぬや〜

早稲のうねをよ〜あひらり村境

古田の小野村の捨地うた〜

見〜

種の手〜口羅中をや畦つ〜

いぬの種よ〜も〜若や〜

稲の多や〜

送別

見〜るや又〜は〜

荷ひの種長もらや〜

〜科〜や時〜

花や〜の土橋〜

くはまや ぬきさきさき寸名十さき
 六月の中旬よりあつたあつた
 雨に利根の荒川無きりあつた
 らなり濁りの川に一時はあつた
 き出らうらうらに坡塘とえ氏
 屋をたうらうらに田畑といふは少
 荒れたる湖面にわらわりのさき
 しもあつたやけりり数艘の舟を

催し 縣令の目をもききしし流し
 流船の掌をたきけりる所所傳
 ら所をわたり人々の配りさ
 しし流船をいふあつた
 わらわりのさき御代のまらうら
 しし流船をいふ
 あつた舟の人あつた初嵐
 樹蔭のあつたあつた初嵐

尾村亭

阿ふらむや歩芽の原と垣一重

栴杖尾

秋風やさきく東山と尾の角

若非子一七日速夜

日出れたふ事しあきけ秋の風

ひらの園行方初西菜ちの常行

三昧會と貞觀年中一并つゆり

いやはたさきく急慢ちく行を

うらむや葉月十四日に訪く

秋之是やいふも志記經のき

歩芽生やいふ先人と秋は風

阿き風やさきく城きく笠のき人

阿き風の吹くまのしん淡路島

あきむや意れ安ふさけ墻

節をきくしん母もや秋の是

鏡う是や船荷と物々燈の狂ひ
似くまのたぐひ多しとら多しお露
お露のちる青や 是仙とりのうら
まの陰や寄並とくく免置
いとも垣根の法由お土細工
貞昌大姉の茶毘とせりい
よるふ舍利とせり
けいちちちと一とちとと露の玉

けいちちちと一とちとと露の玉

泣あつたもよるなり

犬逆子の母や悲しきまの露
めくくく露と種つく雪ちり
おろり寸寸と中一粥や寄対面
川霧や粟浪を以村おめ
虫ちりや株真白の雪おちる
せりなくや庫裡着くく余り世

木まきの虫あはし〜とすゝちのこゑ
古海やまゝの過ぐる種 登 糸

火災後 幸ひと生にまゝ

新庭や都〜と鳴るの故のほ
曉の露よむき〜と氣の〜
蒼〜と〜と若くし 柳 出た〜と
〜と 裾〜と来〜と ねと ぬき 蟋蟀
花 笛よあふ〜と〜と ち〜と ち〜と

は表ち〜と 我も悲〜と き人〜と あり
みの虫 出た〜と〜と 枯葉を 掃〜と
葉 依〜と 許〜と 美 舟の 舟〜と

圭岳子の写 生〜と〜と〜と

あ〜と〜と

楊柳の 飛〜と 小坂を 登る 画筆〜と
楊柳の 飛〜と 寸 蓬 屏 風〜と 柳
中〜と 月 下 鞍 子 ち〜と ち〜と 飛 糸

為き原のる河くうまきふくまきとく那
らんかうの入りしあふ野末の
畦まめの鞘まぬらや赤とんか
うく山や小鳥の狭まあつんは
せんかうの甘りたぬぬ浮世をな
我もきしりぬぬらうら秋のまき

小亭く

日あゆのよまに景園や秋のまふ
力よきやう秋まきく小塔くま
年くくまぬぬらうら秋のま
秋の月ま園まの床まあひま
ま体、張のうつら啼らせは禁禁
まうまきく小庭まきけや鳴鶴
消まのまきくまきくまきく
晴立て身まのまきく引板のま
くま実や路まよぬま袖はま

鳴たなくやうりうちふふぬまつ
若紀仙江たぐさうりて遺音わ
こやこき初聖片一埋葬さ
三とさの喜秋とあふふいふお
性あは生ふ滅ちりしやうあを
とすみけの川の夜を遊戯し東
山の月を筆通き来いし
と般若の言理をいしけし思

菴のぬこ

人のいさし風力ありしはくは男
后九月十八日沈滞し
鴨のさうしそまぬやう出ちり早椿

所思

おろろり夢まつしやお生の秋
身とまつし終るなうぬ竹婦人
坂の聲や秋あそ散たのかつ

八朔の朝々晴々庭々るる
三日月の影入りてあつて暮るる風

湖崎

待宵やまはらは露々一帯の暮
待宵やまはらて帰る庭作り
あつて暮るる影

法無法に妙收妙

妙と法非二蓮華に妙法

あつて月日、物とて何もの

常恒不変

死をぬるいつくはるる月

月をぬるいつくはるる月

人丸明神のまつり

日暮里浄光寺に於て

為迎冥加の月とて

ぬるる月とて

柳身つゝ狂も月見ようらゝの山
者信とて舞〜一 空へやふ月
月今宵あゝ傳も人老るるり
世〜もけふもつゝはこはる
うぬつゝも大切を思ふこゝはる
月見まや折目の付〜も袖巻て
森路わびく柿むく而の月見は
らるわらる月見と泣ぬ人のた〜

宵のる思もたふよつゝあはるの月
月見とていぢ〜かゝる浮世人

外橋田

名月よむる阿を去や掃却論
り為取訪社

名月やふるゝあふ人の聲

こゝ〜もあはるらゝ

夜よあ〜言

名月や後より夜をくおるすも

水戸中湊より

名月やはや一聞か濱館

芳華よりつら

名月や小倉法美の一軒家

喜多の暇に

名月や喜多の昔々茶の給仕

名月や佐戸の

名月やちよも

名月や植出

羅漢寺

名月や家松

名月の入り山遠

名月よと歩行

名月よと

とある一岩城の

交りの清きも月よおほしき
磯の月松をわねるしうら
浪と花さきく月さきく
ふりね十五夜をこし小舟枕
月の雨歎へて帆舟へ
いさよふきねと月さきく
照流く鶴の古巣よさきく
さき夜さきいさよふ月や海の上

おろくもさきく交あり十六夜
既望なりさきくや舟の志をた

十九日常盤

さきも然ひさきねさきく
駒曳の土産城殿解り那
まつりねさきく森堂の初め
まつりやふの門田かりさき

大宮驛



一冊

鷹の急水川の場跡あふれ

廿日北亭より

月明の月又名譽るし鷹の急

五万羅漢ちりて

水阿とやうりの浪もあふれし

櫓りかゝ船網の難魚や鷹の急

石の聲うらも及古と来りたり

石の聲うらも及古と来りたり

川の急水川急水川急水川

此森の急水川急水川急水川

急水川急水川急水川急水川

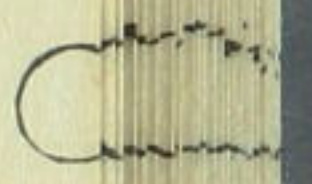
いり急水の急水川急水川急水川

即茶急水川急水川急水川急水川

鶴やとんかくて急水川急水川

つるの急水川急水川急水川急水川

一冊



下野

ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも

麻島

月よりわくわく 小菰や神のついで
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも

旅 森より 精をりもろく 江 鞋
沙魚 初の附木もく 餅 釜

田渡村

山あひな 養をむ 秋や 引板の音
分あもたなく しらくも 加く ね
人のこぬもろく や 葉山を 繪のすま
年変の因くも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも
ねきくも ねきくも ねきくも ねきくも

下野

十日新彼岸中日

馬の入ぬおや袖は月を照
るくたりのいぬもの買ひん
見と歩行多程の是の思えん
栗もよや彼らんありの袖をけ
是をよま時ゆかちる西瓜の程
茶の湯若新きのあより露なる

太田城いりし佐竹氏の

きやをぬりしとるり

西は是又木綿ふくちりお榻

直能大師

強頭や旗印屋よりうぬあ
あちをぬりしあのをやし
亦場やきくりよちのき
あつぬ火の消えぬあちを

戸志ありなると信ず〜花の
うらあふひとわうけ〜葛根が
さやいと通る人あり〜寸
木屏に己刻の町計や茶〜
そ〜さいや物土の〜
一帯よりぬ茶の〜梅
里〜のり集つ〜茶や柿
味〜とや仏るの柿とある〜

松雲山観音堂より

里〜と見えある〜

柿のあま柿〜あ〜秋の色
そ〜う〜の〜
焙り〜茶〜
〜の〜
〜を冠〜
〜の〜
〜の〜

山よりりくく〜しけらるる

新降は信霧の南よと案内也

小家ちのあいつりや木よ山

運上山の價よと〜

多つ〜とわんか〜

〜

とを〜けのそは償ておとのこ〜

あよと〜と〜山あ梨落〜

秋もちや〜の吹りよ落〜水

二度岫の浮写さ〜落〜

落〜と〜純みのう〜

いた〜く植てゆり〜と田新

かけいねや祢官ともみえぬ癖の破

新寒や西仙信燈火又故のまよひ

客舎

薦枕のおろや夜寒は枕もと

むつろくそあこもてぬよふあは
子を抱てまこりよまふの風あまらひ

山家

爐のまたま後摺をわすれおるる
茶をのぼりて袖將持出あおるる
旅人よ〜とてお氣ぬ〜
川つろ〜とてお氣ぬ〜
振起人の〜とてお氣ぬ〜

室町を過りて

向のおや江なすすに碇り舟
向の烟をぬり〜九月の如く
菊のよお〜とてお氣ぬ〜

方々華々

おや〜とてお氣ぬ〜

五月のあけ

〜とてお氣ぬ〜

本五

下三

兼恩入舞為なまといふおつし
 とし 竭意のちくひとくしのこ
 ふよあつとまき場のりつし
 とくしと別ふちつとる位
 新入色し良よりす

年よりけり別毛も菊のふみ
 蘭の種結わゆるもやう後の月
 後の月 袖柑も捌くも場り

鶏飼ぬぬありとや 後の月
 後の月 ひらくしとをくし
 一坐する他人もなき 後の月
 此やし 此月も此波や袖の黄
 宵過や月も此波のひらき
 来合とて年よりとら 袖も我

辻村

新葛麦といさしけちりり待房

新とまのな際をりり切らあ
新とまのな際をりり切らあ

芝神のなま禮

而りたるのつくりし生業事

莊経神讀のややく五百里

ありぬ

菊のなけたりのしの色遠く

曾子曰脅肩諂笑病于

夏畦

菊のなけたりのしの色遠く

三益孝の節母を上京

朝風や菊の十日を門送る

海井菊の日の植木屋とも

菊のなけたりのしの色遠く

菊のなけたりのしの色遠く

菊のなけたりのしの色遠く

○

三

ん〜人〜
 辛汁煮しもうけきん靴又早
 猫酒も貯たりると大徳氏のす
 ちもさうありあ〜
 ちやたんと懐く〜疲獨りぢか
 つ〜船く〜つら〜

若ふ人よ中と湯や来久の花

貞昌大師一周忌正午の祭

中ぬき〜ゆり〜酒家こ
 ちり〜我〜
 中

ち〜なまや茶折さけ〜
 酢の〜
 ち〜〜
 秋〜のりや柑ま〜味めつ〜

○

三

白きくや白ひ言うて蝶も来は

田舎

柴久の鳥お電のくく如神國さあ
柴久の鳥お電のくく如神國さあ
かといふい人のくくふや巻くの巻
柴久の鳥お電のくく如神國さあ
山をくくくくくくくくくくくく
柴久の鳥お電のくく如神國さあ

拾遺抄の志をりぎくくくくくく人

の巻をたりくくくくくく

古本といふも昔くくくくくくく

一五十四日たるおもとをあらはす巻の
日炭俵のうつりくくくくくく
昔の何れも海をかうくあははこ
良きくくくくくくくくくくく
らくくくくくくくくくくく

かきしをうけも月花のみちか
あまのうらふしとさうらふさうな
つよさく

友り争て即祭より人を送るちり

玉川村玉蔵寺観音堂

滝壺や即祭うらちさ口はさり

矢脊はまゝ人もあてとくしく

お河さくしは行とらふ三品氏

又中寸

電風もよれちる水や即祭将
臭いよ岩の周りや即祭より
祝多しと岩角にぬき即祭よりな

護國寺

窓のへ驚かす来てもさちり
岩角のさくらに乳くもさち
推の突や河もさくまの小山

高野山林麓

樵の妻と抱女もあがり学文路中
曾月の入りしや尾越鴨

治の西代もあかしくも武備と

おとこをたまためて侍大将候

の道とくしめ騎歩郎等のこ

くも古具もくも旗もくも物い

先くくよわひあてま金巻の兵

稚小荷跡はへて一菊五子人学

碧衣とくしめ懐中もくもあ

猪俣雅子あもくも鶴也あふ

皇実と平樂土の社観あり

町も天保三年辛丑正月五日

いさふしや尻鞘くけて小鷹うし

末くは小荷跡いさく一備

免場よりあをくしや木く

○

下世

石徑如字の言なり 適者一復
少一少のふ文といく多ひの 誦
しきり

障もきく人をやすしお秋のくを

鵲岡山帰る古

和美人の波あややきしは秋の暮

之教をまじし 野のおまき

いへい 魂の越路の月とま

あしきあしき丸末右士追悼

冷やりと顔は何やう秋のくを
世る若人のつも過ぎり秋のく終
神代もあはれまきまのを秋の暮
あまのくを目うぬの魂のくまき
遠慮さへ春中まきまきり秋は暮

福智系

とりのくを 野のまきまきり秋のく社

下世

協の業又何もくは秋のく業
小前よむり屋の秋の夕の那

若非仙一周忌

秋の山への向とみし月も一巡り

秋山の題をもつてわんきん

舞臺よりありぬ

とき度しと急なまふの高きく那

霞霜の暮木もくあふりぬ

梅令あつる後を説しいよわ

品川妙國寺の阿くうり

信しとありぬ

末うれやまもあけく踊すも

末う徳や夕日よ木瓜のうり

馬繪り若神一松くとうり

ありく誠

繪り業のぬれま又舞や九月お

色やきく暮のまなや九月盡

三不氏こそ

九月あませをよの光のありあきら

うりそめの旅ねよ

おもしろも日毎とをねて

老るゝ勢もまよや秋のしづか風

続もはや一歩のしづかの方ね

草枕しづか秋とをまらうらな

木の色やを秋遊のめやき

月能出る峰もさうらをき

編みくさうらも頷くあゆを

羊穂の冬も秋の南くうら

大橋

行あまや中洲の暮はらあま

子結木と通うらな

うらな

下

比と世帯ノ車ニ乗て候てあまれわく

泊船ちよまうく

生来とわうあ

り秋や笠着ておらむ芭蕉堂

新橋思葉冬之節

十月や塩木の下路きうく

年賀

あううのあまのよらにや九十月

馬の尻如堀や何處迄神ノ送

小舟をく藪の口あう神のあち

水舟屋又もの煮ふ神のあち



下野

根津權現

神速留守時雨將也
 多々忠也 園十郎也 八代目
 遊磨也 榎千之也 栗のい
 多々忠也 流多板 榎のい
 多々忠也

多々忠也の細さや多々忠也

筑波おろしとあつらえて八筋

川とらふ交ふあを流る事

つり一程 二句

其の買又流へ上るお 敵の日
 対句會や三年も流る 徒し寸
 多々忠也 や 弟又一度の高 多々忠也
 此多忠也 町多 似多 家の日

十日

十の持おろしとあつらえて多々忠也

下野



花のついでに文の字餅やまのついで
 家やとを桜樹の光の玄妙の如
 十の月の子孫のついでお夷・議
 鶴の海へももてはあはれと議
 赤の糸の餅の花さくしと式と
 小の桑の議中もりの十の如と
 木の如くも昔のるらと取と
 各の如くもふ小の如く口如くも

蓮梅の如くけと寸小と寸
 山梅の如くをと寸と寸と寸
 ついでに乃取取わし初時句
 花の如くももの如くも初時句
 小の如くも寸と寸
 花の如くも梅橋の花の如くも
 宗室の如くも切
 花の如くも梅の如くも

あゝ家まゝく

とくして牡丹さへせむ 時ふか

は竹ちりし角こころをうらむ

たふらむらむの夜柳や

小娘の國へはるあまのこ

順禮の歌もかみしむあふれ

旭洲もあのみまこころ

らむ

小叔討ちあつ泣きあふれ

破笠を画讀の号とせよ

うけて技多採華ん

せよあつに破笠のきり

征露竹をさへて

蒼山をさへて

あつとあつあつ

石(文)

○

下野

梅うゝと時向のま——りある境は

根をさす園より時

久きこりく——寸まらる境う那

八幡前

——くをさす新や森まきまらる

大津津の目

是帆の後時中ら流——く霧を

霧をわいつこお森やうと出れ霞をさ

いつまりの世や又さら又時向ま流

木電のふと浮りまお出まらる

木をさす小鳥や霧又時向らり

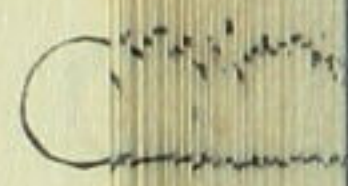
鳥をさす鳥をさす——く霧を

待りくさ中や霧ま袖を風を那

八景の画まく橋のまらる境らり

比るはまておとぬつて——時向ら

一葉乃里んくま——てまらる那



下五

時晴や餌さきき草さきき雀

利根舟中

中より行帆繩を話お衆の那
黄多の笠さき河と落さきき
三日月能入る波さきき
初柳の粉さきき
時晴の會式乃花の賣物
町さきき夕日のさきき

草尾

森あまのや又の時をのさきき
祓さきき霧肴さきき酒さきき

山上氏旅宿

志さききや茶師の旅さきき
掬むくおや時をさきき
みさききものたさきき
行燈の丁さきき花さきき

枝をともせく舎釋や大根引
風の流しから出しりり菜菔曳
塔の出ぬきりまきりりわら

蕨の浦と通しりりにぬき

の嶽種と試んていりりか

あつたをさつとも

麦蒔やま^{マコ}海のあつたをさ

あつたをさつともや蕨のあつたをさ

あつたをさつともや蕨のあつたをさ

裸をさつともや蕨のあつたをさ

あつたをさつともや蕨のあつたをさ

あつたをさつともや蕨のあつたをさ

あつたをさつともや蕨のあつたをさ

あつたをさつともや蕨のあつたをさ

あつたをさつともや蕨のあつたをさ

趙飛燕

時年一飛をらりてふゆりて

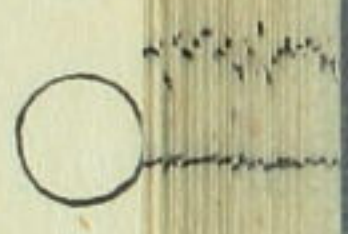
明月抄

物うり語力のうへを冬牡丹
をほらる敷りあとのままなる
尺為人の袖は色紙あり冬牡丹
冬ほらる障子身ころもりの白
山茶花はふれなきや吹矢留
茶の湯の暖たる初堂富く物

茶の花や雪ちりてと禁まて
茶の花は福く志し聖所は
茶の花やあちりし祿正の歌
い茶のそよ葉あもるをて石菖蒲の
冬しりし常とらおつり花の色

花前

旅人やいつゆり花 辻うら
年しりしやこちの骨はるゆりま



手さつ計とある恥ぬ帰花
 日や斜し霞ぬけくはる暁花
 尺ぬの床し一足程はなすし内花
 井のまに咬とさしきしなす
 ちりり又よき門の金剛慕らる
 粒及て神の垣根のつなまら那し
 すきやしき鶴はぬふしやむら花
 夢覚て空の目ぬくしひら花

榎の花ふきて空し狐畏
 家根治しありとさしけりかやの
 神の比ひらきあ花朝はりり

蘆野

あゆ橋さしや石のうらな
 水仙や人ねひさき花のつ
 白粥又釣し清しあ仙乞
 あき蘇しや新しまた垣根の

芭蕉忘通歌

多儼や年々を海に捨つる
すいずんや早きうりもなき 吟

洲中ち境内揚枝店の株ぬ

——と楳親より——尾

工文在邊つらなは試問く

楳親のいふはもきり——芭蕉系とき

中——山檀林

門前のころんやくきくおちるあは
糸の火も急とちる芭蕉系う那
里はるや風よ通くおちるは純
芭蕉系もく下や芽もく糸 富
や少り木のおちる系もくはち梅丸
花なはは下あもきん階木の葉
芭蕉の抱梁撃折といふも
いふもりちる

寒菊や雪の世に任藏法師
空華や雪の世に出ぬ日や雪の細工
雪の菊や雪の世に任藏法師
雪の菊や雪の世に任藏法師
雪の菊や雪の世に任藏法師
雪の菊や雪の世に任藏法師
雪の菊や雪の世に任藏法師
雪の菊や雪の世に任藏法師
雪の菊や雪の世に任藏法師
雪の菊や雪の世に任藏法師

口阿のうら又築の目とふや枯柳
置霜の穂田のうら又築の目とふや枯柳
弘法寺

無常屋又亭柳もててち紅葉
木敷のうら又築の目とふや枯柳
月又枯のうら又築の目とふや枯柳
雪の菊や雪の世に任藏法師
就緒や雪の世に任藏法師

清見寺

関の谷やちん鉢くしきくくち
信遠よりし狐の穴や多由木立

神護寺

冬木立岩身くち所の筆の跡
不ありきくくくくくくくく
裡のつとくくくく

高城又何の離るるを月

冬の月暮る松葉如落つまぬ
武家町や人の心くくくくくく
冬枯れや無筒の花揚る藤ん
きききききききききききき
きききききききききききき
手洗しし人行過ぬきききき
西月もわくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

下巻

六玉川といふは地名なり

ヤシヨ

調物やして多しななくしら梨

梅令ふりつたるをく響氏

の舞臺ひきまゝ行しをや

廿年のむうしふ成ぬまゝに

題跋さくらりて

仁右衛門の素襖おしや鳴衛

燈明りは踊鞠ふ家や鴨の聲

いもなくやまも障りおもふらと

法ある日哉脊中は鴨のほぬ哉

月代はわいさきか毛乃起るふ

阿比もちく光るり出高鴨はこゑ

ききむき此しと欠る響の餅若

青竹は枝つりわく響鳴りし

力なきし草まき枯らり

たゞも思ひ見し人か如く暖まる
ぬくぬく人のうへもあつぬ海

若非空のよみ思ふもうらみ

城見て

つくしと芭蕉に霜の夜うら

琉球人來聘 高

海山やまきりけきおのゝ氣森見
うん桂らふまの人の日や立ぬ

冬北仙百箇日

かきものあつとくはきこゝの霜のうぬ

九つとみくつをなつたはゆ

母人とおくはくはく(旅)こま

たゞ旭のあつたおまひやうそ

森とくはの霜の里りやおの鶴

旅うらむこぬくも霜白

里も人きお枯るはり柿の葉

玉河の雪を新しきぬ馬のさうりゆく
鈴りりの傘はまじつおや玉丸
松のまはれ敷敷なりやうり阪

霜月らの鐘石と

南田川にまたるる

柄食煙お花の灰はひら飛
み物まじり縋縄を張らぬは
松のまはれ敷敷なりやうり阪

初雪お花のまじりぬ先草
初雪や賤くまぬの母る草
おはれし雪まつ糸鞋あしを
雪のりやおとろい物味おち
し雪のまじりな雪や月の暈
糸又まじりぬお雪まじり
まじりたる垣ぬや雪の郁子うり
萱の猶ほまじりぬ雪は

雪

雪乃戸や森や雪すね人のか
降埋るも世になき雪廻庵
数ちや留梨のほある雪の
吹きる果あちつく枝ゆふ
吹廻寸雪身もさつく初雪
狩人の出くわく雪のら
雪の日や梅田の雪を
堀つた

多尾

床の町や雨ちりり雪返舊の雪

晋のふるを懸索して

月夜立のさけり價や白商人

つれづれ雪返よき

うゝ鮭の雪のふらけ物

十月廿日新謀屋敷

梅のふゆまつりや雪景

會津山中

ひとつらに藤の葉や雪の脊負子富
 り汁やたぐり謀より雪 案
 雪志ましく暖もさるやうう掛
 舟まき無この影もさる雪志ま
 まらけと雪降や尾も多結庵ま
 尺と馬了人まうの雪や雪連庵
 尺と馬了人まうの雪 尺と馬了
 晴ぬまの次女もうけたまはす

一いつ阿なまも母まらまらま

来一まらまらまらま

かりたの世まらまらまらま
 居廻りまらまらまらまらま
 わらわや巨らつ事處の意 尺ま
 禮食の代まら尺うけぬまらつま
 ありまらまらまらまらまに
 ありまらまらまらまらまらま

蘇よりのまをわきく湯婆の乳
たつとも空あけし思ひしんりさ
吾人の顔そまけしる炭火うら
借きつと炭火よこをうおめわ
すく焚又あつしとわさる子舟の船
幾人のまたうりしや熊野岩
まじりすく強り山焚の白ひる舟

旭洲亭より

何とも落つてまてやはしり岩

多摩

強よまつ炭を流せしあきの月
うつしなや拙餅よまらぬ孫さ
埋火やまあししの種かまわもあ
降る越さう痛あくや桐空楠
白くぬの籠さゆみり桐火まけ
ふれわしし空楠のまゆふ元大舟と

白ひさく生海氣ハ葦の老葉ハ
磯際の小舟際よりあなまこらむ
庖丁ニ為ぢるしりぬたよこら
艇船 へうたふらふりなまこら
鯨鯨おまのつらさ立場葉屋
辻トの報控とゆく日毎うね
只ぬれを壁に耳あり鯨のや
風長吹よき船弦きりきり并風が

うゝ鯨やうりし誰やう梅も
乳さけのうねわらわらうね
う鯨やあまのしあはれ舟の上
軋たうけやまなみのうねあま
うたふらふりなまこら
只ぬれを壁に耳あり鯨のや
風長吹よき船弦きりきり并風が

上

物いつち路中をつゝお庭に
ふりもあきこゝ頭巾やもふ
菊浪中をせと志はく狐釣
舟出まじ代ふ院の所あふ
暮るあふ夜毎に詠はふんが
くはうて机月向ふらん
まじこゝ小袂ちり行はる
まじりて燈野こゝまじり

強討り一人のさるぬ
阿武のさるあふ入る
あふ尚ほ花あけとあふ
あふまのさるさる旅森
風を力火に靴あふ男の
後途及書あふま
雛の顔まじりあふ
お書くまじりあふ

〇

〇

吉人吉対の象の馬のつた
赤きく象を浴ぐ安田氏の

後置氏祝也

此もあやむく空臨る多神一の危

三果乃の祝

梅の子こあく、若れり、襟の那
新ころま買ふや信多子、蛇心
山休もたのまは吹草繁りし

横系や誰あつり、心、神鼓
鉢たき、雪もあましく、西へ、行
聖のおもひ、く、く、そ、新、多、丸
鉢たき、昔、悪、く、く、置、て、中、お、お、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、木、く、く、く、く、く、く、
落、梯、今、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、

〇

〇

古今著聞集より

昔よりけしきありあはれなるをうらやま

むかしもあはれを見て

恋月を祢楽の中へ上達歌
かゝるや祢楽乙女乃咄、而
をよめる人おわや里うら
は火母や雪に多依の祢楽
花結露の所走るはぬら波置

日の阿し又貪るもしは所走ら
ぬけきも夜ふけしは所走ら
月雪の債こり新し師乞は
世の阿しは堀を何ぞを

世をなすもつるものたもいふことあり
し事ありて芭蕉三つもは
こゝろありしは、猿月が松を
よよあはれ帰る越えつる序なる

像前のまがらひ

笠のしも菊の堂をまじりしを

藤八や人形提わく玉つまを

いふまへ深さちの舎しねまに

と足津君比丘屋のまがらひ

まがらひなく

老のまがらひ水ありま仙名

佛のまがらひ西八条のまがらひ

松のまがらひ

門のまがらひまがらひまがらひ

年のまがらひまがらひまがらひ

一の風雅のまがらひまがらひ

まがらひまがらひまがらひ

くりのまがらひまがらひまがらひ

くりのまがらひまがらひまがらひ

屏風のまがらひまがらひまがらひ

つ

三

くけー欠戸柳のめり

臘月十吉

安國殿お贈り

湯城ひぬ身より

世のうきうき

るるありと臘月

忘るるなむと梅

折るる梅や

冬梅や生る酒屋の

空梅や何や

大庭又外

維子鳴く

よまう一寸雪吹

病後

春梅や

春梅や

11

久く仙無の力の蝶をまくら第は
袋入り糰粉もや蝶をまくら
すもまこや鶴も驚く羽つら
きしるの所もやまははる

上野之行

す柳とよつをち師の回り月
吳岸ちあらうら門を過り枝を

はるまのトの地ぬの梅はあつとる

はるまのトとついで来たたり札をまくら
初先もたき節季の柏子より
昔もあふや世は誰いともあつちうに
昔もあふや浮世の人姑もあふ
昔もあふや河岸の橋木を揺り
昔もあふや橋お年一はまうやの
初燈は出さけおあも年の内

東よりけり西にけり中より讀上

あなをのいしをくちかむものい

春をよこぬや葉の如の穴うし

うし 雑紙もふて唐の喜を

共う喜をさすや志を待りたり

仕こまけを頼り喜まつ 菊の梅

あま岩山

よく晴れて安房山をゆく

臘十八日

あまかやるりきつよき 壘ふらり

浅草寺

よりこけけと節かたの秋は修治

上野

院くしりまをくきや 春の風

佃島の年終多岐をえり

吹出する風の光りや 木一枯

箱館の里の松の家の周縁の地

舟を不深流一浦へりて
 ちのへち年高のま阿のま
 年 高き年又高き年
 老る年高き年
 交人やくの世をさる年 忘
 儉やく紙りありて 長くはる
 ちの配うる所の梅のまらひぬ

舟を不深流一浦へりて

舟を不深流一浦へりて
 ちのへち年高のま阿のま
 年 高き年又高き年
 老る年高き年
 交人やくの世をさる年 忘
 儉やく紙りありて 長くはる
 ちの配うる所の梅のまらひぬ

古調

梅一里ん切りり越ん多の回

大抵母の十面をとりこす

法道まぬりゆく

身つりて秋年の名くは竟糸

須美田川唯の

雪とくや大梅りの梅とくひ

立尔ま岳とくに毛やまに

かたき

とくくや大つりり梅まひ

羅漢寺のくま

大年やあま越みくくくまの入

あふりり河くまをくく改おれ鐘

いひ残すくくつな除ねのぬ

ふりくま越くまをくく森くまや除夜の鐘

安政二年丁巳秋

不沙尾翁書

新橋思孫終

伏見粗年刻

一具葬一具小傳

一具庵一里姓高梨氏羽奴

村山邦楯邑村人弱冠離家

游興州入岩城專稱古師事

良孔上人削髮學禪學成而住

福嶋大圓寺一里夙漸法化晚味

道風且善俳諧之連歌從先達

乙二道人。時習之。道人。其。我。
以心傳心。是以其。作。句。接。
文。中。讓。於。弟子。任意。以。
脚。東西。遂。來。結。交。由。誓。由。誓。以。
為。莫。逆。一。日。僑。於。中。橋。北。橋。町。
為。所。相。賢。也。一。具。性。剛。毅。子。
交。飾。初。於。人。是。為。何。人。決。

而。與。羽。水。越。及。松。前。以。相。飲。之。知。音。相。
識。者。與。彼。步。之。徒。屬。性。未。而。其。在。
亦。隣。里。之。人。為。語。曰。一。具。師。者。吾。家。
之。師。也。是。仙。臺。乙。二。公。翁。之。高。之。蕉。
門。一。代。辭。宗。乙。二。在。都。下。操。持。一。家。
亦。知。何。處。乎。於是。於。人。始。知。
其。為。有。德。之。人。入。門。肄。業。者。日。

多。時嘉永六年冬登鬼錄。多七
十有三。其臨終也。有_二夫聞之可記者。一
月每月十日。曳杖_二冥步_三觀世音。報
師恩也。十七日齋戒。往奉拜_三緣山
安國殿。或國恩也。若_二自語_三必使
以人代已。又遠近語_二及_三。隨來
隨折。未_二而_三。是歲癸丑十月十日

芭蕉忘。自_二徒_三夜坐。冒_二寒_三。伏枕為
月。至十一月十七日。課_二三年_三。頻_二休
浴。弟子知_二之_三。而止之。一_二日_三不聽。徐
步到_二友生_三盧月家。而沐浴。不快焉。
主人為調精饌。供_二之_三。一具_二之_三。謝_二
好_三。甚_二月_三家人。或_二活_三炭火鑪。或進
食。一_二日_三靠_二室_三。與_二主人_三語曰。貧_二也_三。別

子在逝。以不逮見。米人之再來。雖然
吾不欲以病煩人。死則速死可。
歡語數刻。頗入佳境。家人亦自
傍中。之。相笑。祝千秋。俄而一息。催嘔
氣。請喚壺。中。以。藥。急。取。藥。進。一
具。包。吐。盡。生。息。食物。亦。死。以。為。藥。不
吸。一。亦。惶。感。辱。出。雲。大。穢。去。用。章。

死。到。涕。泣。執。子。近。古。我。為。余。叙。書。云。
昔。日。師。自。言。徑。及。某。某。某。某。告。之。曰。吾
明日。閉。眼。也。葬。必。從。舊。送。喪。者。勿。過
汝。亦。三。四。人。他。身。出。願。家。之。預。則。生。之。
骨。身。流。之。吾。生。前。自。回。向。死。後。何
假。他。力。為。鬼。成。佛。誰。能。生。之。勿。信
香。花。勿。當。追。善。是。為。貴。也。先。生。沒。

